
「一日保育者体験」に参加した親の 子育て意識の変容

岩本 一盛 齋藤 政子

抄録

近年、保育現場では子育てを支援する取り組みが行われ、そこでの親の意識の変化についても多くの実践研究が報告されている。しかし、親が<園生活を通した子育て>の中でどのように変化していくのかを親自身の語りから解明しようとした研究は十分に行われていない。本研究では、「一日保育者体験」に参加した親に対して半構造化面接を行い、入園後の生活や子育てに関する語りをM-GTAを用いて分析し、親の子育て意識の変容のプロセスについて考察した。その結果、親は保育体験活動の中で、<新参者としての理解>、<親としての理解>、<体験保育者としての理解>、<保育者的理解>を経験し、その間を揺れ動きながら、子育て観とパートナーシップを醸成する方向に向かうことがわかった。保育活動に親が関わられるような機会を用意し、子どもや子育てについての理解をサポートしていくことを検討していくことが期待される。

キーワード

親自身の語り 園生活を通した子育て 一日保育者体験 M-GTA 子育て意識

I 問題と目的

戦後、核家族化の進行の中で、地域や家庭における子どもの数は減少し、群れて遊ぶ子どもの姿が見られなくなってきている。都市化や情報化の伸展により直接的な自然体験の機会も少なくなり、子育ての知恵や遊びの伝承が困難になってきているという問題も指摘されている¹⁾。しかし、だからといって、「昔の子育ては良かった」と手放しで賛美するのも早計であろう。子どもは「避けがたい消耗品」(Aries, P., 1966/1980)²⁾と言われ、人としての権利を持つ存在であることを認められなかった受難の歴史があることも知られているのである³⁾⁴⁾。

しかし、それでは、現代の子育て環境は、親にとって申し分のない環境かと問われれば、課題は多いと言わざるをえない。「夫婦とその血を分けた子どもからなる家族」を「家族」とし、そのような「家族」の一員でなければ健全とはいえないという「家族イデオロ

ギー⁵⁾が存在するという意見もあり、また孤立した子育ての中で、「家庭教育の機能」⁶⁾が強調され、子育てに夢を抱きづらい状況があるとも言われている。

こうした子育てを取り巻く環境の中では、安易に「家庭の教育力」⁷⁾について議論する前に、親自身が子育ての中から喜びや生きがいを感じられるような社会風土を醸成していくことが必要だろう。「家庭」の教育力については、とりまなおさず「家庭」の構成員である親が、子どもの心身の育成に大きく関与する存在であるゆえに、子どもの育ちに関心と喜びをもてる環境にあるかどうか問われるからである。

そもそも、何をもって教育機能とするのかという問題も考える必要もある。「教育」というものが、「子ども（人間）をそれ以前の状態から脱皮させる働きかけ」⁸⁾であるとするなら、親自身の教育力を変化し成長するものとして捉えることも必要であり、また、親は子育てをどのように捉えているのかという問題を考えなければならない。

子育て支援に取り組む中核的施設として近年重視されているのは、親にとっての保育所（以下「保育園」の表記を使用する^{注1)}）などの保育施設⁹⁾¹⁰⁾の役割である。1998年に改訂された幼稚園教育要領においては、幼稚園に対しても、「幼児期の教育の支援」(学校教育法第24条)を明記するなど、子育て家庭への支援を求めるようになってきたが、保育園では、0歳児からの子育ての知識・技術・経験が蓄積された場として地域の子育て支援センターとしての役割を担ってきた^{注2)}。保育園や幼稚園の子育て支援の取り組みを分析した研究は日本保育学会等で数多く報告されている¹¹⁾¹²⁾¹³⁾。

しかしながら、その多くは、保育園・幼稚園の子育て支援の取り組みそのものを分析したものであり、保育者や支援者の語りを分析対象にしたものも多い。そもそも、子育て支援というのは、増山（2009）によれば、「親が子育てしていく力を援助し、子どもの育ちを支えること、そして同時並行的に親自身の育ちを支える」¹⁴⁾ことである。であるならば、保育園の子育て支援を受けて親自身が変わっていくプロセスについて、支援する側の語りだけでなく、親自身の語りから検討することが必要ではないかと考えられる。

また、近年、「保育参観」ではなく、保育者として親が現場に入る体験を保育園や幼稚園が用意するという「保育参加」が多くの園で導入されている^{15)16)注3)}。「保育参観」は、「園での子どもの生活やあそびの様子を父母・親に観てもらおう園の行事のひとつ」¹⁷⁾として、これまで多くの園で取り込まれてきた。しかし、ある一日の午前中、多くの親が園児を後ろから取り囲み、保育者と子どもとのかかわりや、子ども同士が遊ぶ様子を「観る」というものであったため、多数のおとなの来園に子どもが興奮してしまい普段の園での様子を観ることができないという場合もあった。近年取り込まれている「保育参加」は、都合のよい一日を親が選んで園で過ごすという方法であり、親と保育者がゆっくり話をする時間を確保できるものである。親にとっては、保育を「観る」だけではなく、「参加する、体験する」ことにより積極性が求められ、子どもと保育への理解が高まるのではないかと期待されている。「保育参加」は、「親の視点が我が子に集中することなく、個々の幼児の姿や集団での姿を客観的にとらえることができ、また自身の非日常的な経験として有意義であり、保育者に対して共感的な視点を持つことにもつながる」¹⁸⁾と評価されている。

親が園の活動に関わる機会は、毎日の送り迎えの際の担任とのやりとりや連絡帳、保護者会や行事への参加など、直接的間接的に多く存在するが、実際的な保育活動に参加するということは、親の意識変化に何らかの影響を与え、子ども観や子育て観を豊かにする可

能性があるのではないかと考えられる。

したがって本研究では、保育園と親との関わりの中でも、特にある保育園で実施されている「一日保育者体験」を経験した親の園生活や子育てに関する「親自身の語り」を対象に、親の子育て意識の変容のプロセスを分析し、「一日保育者体験」における園との相互関係を通して、親の子育て意識が変容するプロセスを明らかにすること、「一日保育者体験」という取り組みが親にとってどんな意味があったのかを考察することを目的とする。

II 方法

1. 対象者及び調査方法

対象者は、K保育園5才児の親7名である。対象の抽出は機縁法によった。その際、親の中から、平成24年度に「一日保育者体験」を経験し、調査の目的、録音の承諾等に合意が得られ、1時間程度のインタビューの時間を取ることが可能であり、保護者会への参加率の高い親を抽出した。そのため対象者全員が保護者会役員経験者であった。

インタビューについては、「一日保育者体験」終了後、体験者に対して調査の目的、調査内容、結果の公開、面接内容の録音、面接の時間については家庭の状況も考慮し、16時からの1時間程度として説明し、合意の得られた7名に対して、K保育園内の個室を使用し、一対一の半構造化面接法を用いて面接調査を行った。面接期間は、平成24年7月から10月の間、時間は一人当たり40分から90分であった。なお、倫理的配慮については、調査目的、プライバシーの保護、拒否の権利、結果の公開、録音の方法とデータの扱い方などについて説明し、すべてについて了解を得た。

2. 調査内容

インタビューで聞いたことは次の四つである。

- ①「一日保育者体験」を終えての率直な感想や発見、特に子どもたちと保育者とのかわりや子どもの姿について
- ②生まれてから入園前までの子育てにおいて、喜んだこと、苦労したことについて（遊び環境、祖父母・地域との交流等）
- ③保育園に入園してから、子育てにおいて、喜んだこと、苦労したことなどについて
- ④自分の子ども時代のことについて

III 分析

データ分析の方法として、質的研究法の一つである、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ¹⁹⁾(以下、M-GTAと表記する)を採用する。M-GTAを採用した理由として、第一に、M-GTAは、ヒューマンサービス領域における実践への還元を目的としている。第二にその技術面において、厳密なGrounded-on-dataを確保できるように工夫されており、よりリアリティのある現象把握とその深い解釈を目指す本研究の目的に合致する。第三に、M-GTAは研究者自身の先入観やバイアスなどについて意識的であることが徹底して主張されており、この問題に対して研究者自身が自覚的になることができるからで

ある。M-GTAでは、方法論的限定としてデータの範囲を制御し、その範囲内で分析を厳密に行うため、分析テーマと分析焦点者の2点から分析を行っていく。実際に得られたデータに密着し、分析を行いやすいところまで研究テーマを絞り込んだものを、分析テーマと呼び、実際の対象者を抽象的に設定したものが、分析焦点者である。本論では、分析焦点者を、〈保育園保護者会への参加率が高く、「一日保育者体験」に参加した親〉とし、分析テーマを、〈入園後、「一日保育者体験」における園との相互関係を通して、親の子育て意識が変容するプロセスを明らかにすること〉とする。

M-GTAの性質上、分析は量的調査のように段階的ではなく、継続的なデータの解釈が中心となる。分析手順は、「半構造化面接→語りのデータからトランスクリプト（逐語録）を作成する→分析テーマを設定する→分析ワークシートを作成しつつ概念をデータから生成する→カテゴリーを生成する→結果図を作成する」という手順でおこなった。同時並行的に他のデータを検討していき類似の具体例が出現するたびに概念名と定義を確認し、包括度が低い場合は修正を行った。概念の数だけ分析ワークシートを立ち上げるが、分析ワークシートの中では、類似の具体例だけではなく、対極にある具体例も検討した。分析ワークシートを何度も見返し、概念名と定義の修正を繰り返し、それ以上修正の必要がなくなった時点で、概念の完成とした。さらに、概念完成後、概念間の関連づけを行いカテゴリーを生成して、カテゴリーの相互関係から分析結果をまとめた。概念とカテゴリー、結果図については、調査者間だけでなく、当時所属した質的研究法の学習研究会にも提出し検討を重ねデータの妥当性確保に努めた。概念名と定義及びその生成過程の具体例として、分析ワークシートのひとつを表1に示す。なお、保育者および親の名前が語りの中に現れた時には順にアルファベットをあてて記した。

IV 結果と考察

分析の結果、19の概念、12のカテゴリー、7のコアカテゴリーが生成された（表2）。

これらの概念とカテゴリーの関係を結果として図示したものが、結果図（図1）である。その際、理論的メモに記入された別の解釈や概念との関連を参考に、分析テーマに照らした現象の動きは矢印を用いて表した。

M-GTAにより構築されている厳密な手順に従い、概念とカテゴリーを使用して、〈入園後、「一日保育者体験」における園との相互作用を通して、親の子育て意識が変容するプロセス〉を記述する。概念を『 』、カテゴリーを〈 〉で、コアカテゴリーを〈〈 〉〉で表す。

〈〈はじめの緊張や不安からの一歩〉〉

保育園に入園後、様々な場で親同士のコミュニケーションを成立させるのに難しさを感じている。「子どもと子どもの関わりとその親同士の関わりが難しい。親同士のことなんですけど、仲良くなりたいですけど、あまり深入りしすぎても、まあ、これから、長い、保育園、小学校、中学校と・・・難しい」というように、不安を感じ、また『親同士の関係に壁を感じる』。園との関わりを持ち始めるということは、言い換えると園で日常的に作られている社会に新たに関わりを持つことである。「入りながら何かわからないままやってい

て」という語りのように緊張や不安を抱きつつ園に入っている。特に「一日保育者体験」については、体験保育者としての立場を求められることから、緊張はなおさらである。しかし、与えられたことはとりあえずやってみることも大切だと考えており、「役員にあたったちゃったんです。ははは、・・・」と、『案ずる前にチャレンジする』ことで、<はじめの緊張や不安からの一歩が踏み出される。>

<<保育体験を通した子ども理解・保育理解>>

◎ <<新参者としての理解>>

「一日保育者体験」が始まったばかりの時点では、自分が新参者として位置づいていることを認識している。そのため、「一緒に食べたい人はじゃんけんをしてください、といわれると全員が手をあげてくれた。すごうれしかったですね。」という語りのように、『子どもたちに受け入れられた安堵感・喜び』を感じたり、「昔は結構、いろいろと持って帰れたじゃないですか、食べ残したパンなんかも、・・・そうそう、いついつのパンが机の中に残っていたりして・・・」というように、自分自身の『子どもの頃を思い出し子どもの気持ちに近づく』意識もみられる。園の中での子どもたちの行動一つ一つが新鮮に目に映る。

◎ <<親としての理解>>

我が子の姿を目にし、他の子どもの姿と比較しながら一喜一憂する語りも多い。「自分の子と違うところとか、同年代の子はこれぐらいのことはできるんだろうかとかがまずわからないんですね。・・・そういうのをみる機会はすごくよかったです」というように『我が子と比べることによる、小さな安心と不安』を感じている。また、わが子の園での姿や保育者の子どもたちへの関わり方を見ながら、時間ちゃんと気にして食べてるの、すごいな・・・家でだと結構気にしないので・・・ちょっと偉いなと思いました」というように、『親として子どもへの関わり方に気づきを得る』ようになってくる。つまり、<小さな安心と不安を感じる>ことが子育ての振り返りと理解の深まりにつながり、子どもに対する<<親としての理解>>が深まっていくのではないかと考えられる。

◎ <<体験保育者としての理解>>

「書けない字があると、隣の子どもとかが教えてくれて手伝ってくれるんです。・・・一生懸命手伝ってくれて・・・お互いの、助け合えて、協力し合ってやってくれるんだなと思って、・・・」という語りからは、子どもたちの様子から、『子どもたちの助け合いに感じ入る』親の姿が映し出される。そして「中には得意ではない子もいるじゃないですか、指使いとか、だけど・・・練習すればできるようになるから、根気よくやってあげて、できると、わあすごいとほめてもらって、・・・」というように、保育の中で、「子どもの個性が認められていることを知る」。

さらに、「大分冷静というか、もうわかっているなというのはすごく感じますね。もうみんな。でもまだまだ・・・かわいらしいところもあり・・・」という語りにもみられるように、いろいろな子どもたちとの関わりながら、『心地よい距離感で子どもたちの純粋な気持ちを感じる』親の姿もある。また、「何か家とはまた違う空間なんだな」と園生活の意味について考えたり、集団の子どもたちを見ていることにより前年度のクラス集団の様子を思い出し『クラスの子どもの成長を感じる』。このことから<子どもたちの純粋さと成長を実感する>こととなる。

◎ 〈〈保育者的理解〉〉

体験保育者は、我が子のクラスに入ったとしても、そのクラスの子どもたち全員に保育者の一員として平等に関わることが求められているため、時間がたつにつれ必然的に保育者的な視点で子どもや保育に向き合うことになる。「こっちから、何々をつくってください、お願いします、って頼んで、そうすると注文したものを作ってくれて、それをプレゼントしてくれるのです。」というように、わが子ではない子どもとの1対1の関わりを通して、『子どもと1対1で向き合うことによる発見と喜び』を感じている。また、「人懐っこくお話ししてくれたので、だから、みんなの話を聞きたいんだけど」というように、『大勢の子どもたちと関わることの難しさを実感する』語りもある。保育者と子どもたちとの関わりを連続を間近に見て、「先生が普段どういう風に、しかり方とかもわかるし、A先生は優しいですからね、・・・何となく普段の生活がすごく見えました」というように、保育士の“人となり”を語る場面もある。また、『保育士から子どもの関わり方への気づきを得る』ことにより子どもとの関わり方が深まってくる。また、逆に、保育の難しさ、〈子どもとの関わり方の難しさを実感する〉ようになる。

〈〈多様な子育て観とパートナーシップ〉〉

〈保育体験を通した保育理解・子ども理解〉が深まってくると、「年中さんになるとすごく大人っぽくなるんだなと感じてちょっとうれしいというか、すごく成長したんだなとすごく感じた」という語りのように、改めて我が子と向き合うと、『我が子の成長を実感し喜びを感じる』とともに、「今になったらあのときはもうないんだなとおもって」と、『我が子を改めて愛おしく思う』ことから、〈我が子への情愛を改めて自覚する〉意識がでてくる。

園や保育者に対しては、「もう卒園なんてなったら本当に泣いちゃうなと思って、先生の気持ちのすごくよくわかりました」というように、子どもたちに『保育者の愛情を注ぐ姿に共感する』意識もみられる。また、「自分の子どものように考えてくださっているんだなって、すごくよくわかりました」という語りだけでなく「熱が下がればすぐにでもというところがあるじゃないですか、大変ですよ」という病児病後児保育に関する語りからも、『園の立場を理解しつつ葛藤する』も意識もみられる。こうした語りを通して〈園や保育者への理解の広がりと共に共感〉が生まれているとも考えられる。

〈我が子への情愛を改めて自覚する〉ことや〈園や保育者の立場を理解する〉という子育てに対する共通の認識をもった親同士は、その後の園との関わりを通した関係形成の上での垣根が低くなり、互いに連絡を取り合うような親同士の関係が生まれていく。「自分の親にいてもなんかただ返されるだけ、それで終わっちゃうけど、仲間っていうと何か違う答えも出てくる」という語りは、家族との関わりにはない何か別の質をもった関わりが、仲間の中には存在するものを感じているものである。これは〈共通の関心から親同士の関係が深まる〉中で、『すばらしい仲間との出会いを肯定する』姿であり、〈〈多様な子育て観とパートナーシップ〉〉の醸成に向けて認識が進んでいく。

以上のように、入園当初は、親同士の関係に壁を感じており、緊張や不安を抱えていたが、〈〈はじめの緊張や不安からの一歩〉〉を踏み出すと、一日保育者体験のなかで、〈〈新参者としての理解〉〉、〈〈親としての理解〉〉、〈〈体験保育者としての理解〉〉、〈〈保育者的理

解〉という四つの理解を通し、〈保育体験を通した保育理解・子ども理解〉が深まっていった。慣れない空間に足を踏み入れる際に、緊張や不安を持つことは当然であり、ここでは、取り組みとして行われている「一日保育者体験」の中で、どのような理解が進み、それが、〈〈多様な子育て観とパートナーシップ〉〉の方向へつながっていくのかのほうが重要である。したがってこのプロセスでは、〈〈新参者としての理解〉〉、〈〈親としての理解〉〉、〈〈体験保育者としての理解〉〉、〈〈保育者的理解〉〉という四つのカテゴリーが中核をなすと考えられる。これらのカテゴリーは、結果図でも現象の動きとして矢印で示されたように、〈〈新参者としての理解〉〉から一歩進むと、〈〈親としての理解〉〉、〈〈体験保育者としての理解〉〉、〈〈保育者的理解〉〉という三つの理解を相互に行き来するのではないかと考えられる。つまり、保育場面では親は、親、体験保育者、保育者という三つの視点から子どもと保育者、そして保育そのものに関わっていくことにより、自身の子育て意識をも変化させていくのではないかと考えられるということが本研究の知見である。

IV 総合考察と今後の課題

1. 「一日保育者体験」は親の意識の変容にどのような意味があったか

第一に、「一日保育者体験」は、親にいつもとは違う体験を提供し、いつもとは違う感情を味わい表現する機会を作っていると考えられる。親にとっては、子どもの入園と同時に、親との付き合い、保育園というものとのお付き合いが始まっている。保護者会などで「親同士のコミュニケーションを成立させるのに難しさを感じ」始めている親もいる。しかし、「一緒に食べたい人はじゃんけんをしてください、といわれると全員が手をあげてくれた。すごくうれしかったですね」という語りのように、子どもに受け止められる喜びを感じたり、「(家で)紙芝居どうだった?って聞いたら上手だったよって言われて、ちょっとうれしかったですね」と、我が子から褒められるという経験をしたという親の語りもある。「子どもを受け止めたり励ましたりする」という行為が「良い親」の必須条件のように認識されている社会の中で、「子どもから褒められる、認められる」という経験は新鮮であったに違いない。「一日保育者体験」は、いつもとは質の違う新しいコミュニケーションを創出する機会となったともいえるのではないだろうか。

第二に、「一日保育者体験」は、子どもの発達や一人ひとりの個性など、子ども理解を深める場になっているということである。「書けない字があると隣の子どもが教えてくれて手伝ってくれるんです・・・書けないのでは終わらないんです」という語りのように、多くの子どもを観察し自分が持っていた先入観と照合して修正する作業が保育場面で繰り返されている。

第三に、園や保育者との相互交流の場としてだけではなく、親同士のつながりを期待する場にもなっているということである。「自分の親にいつもなんかないただ返されるだけ、それで終わっちゃうけど、仲間っていうと何か違う答えも出てくる・・・さっきは深入りしないようにといたけど相談相手、友達は大事です。」という語りのように、子育てに関する語り、調査者と対象者である親との会話の中で、次第に子育てを共有する自分自身の仲間についての語りに変化している。子育ては、その喜びや辛さを共有する仲間がいると、もっと楽しいものになるという実感や期待が、語りの中で表現されているのである。

しかしこれは、「親自身の語りを聴き取る」というデータ収集の方法自体が、結果として、調査者が予想する以上の子育て観の変容をもたらしたともいえるだろう。

インタビューが、「インタビュアーと回答者との相互行為の場であり、それによって意味が産み出されてくる過程であることは、インタビュー過程の録音が可能になって以来、明示的に捉えられる」²⁰⁾ようになってきている。回答者は、積極的に聞き取ろうとするインタビュアーとの相互交渉の中で「語り」という「意味」を産出する。その結果としてトランスクリプトがあるのである。つまり、データ収集とデータ解釈とは分離できず、「語り」の産出が活性化されていく中で、親が、親同士のつながりを期待し、多様な子育て観とパートナーシップを志向する子育て意識に変容していくという面が浮き彫りになったのだろうと推測できる。

本研究における対象者は、前述のように、保護者会活動の参加率が高く役員経験もある。そのため、園との親和性や園や保育者から学ぼうとする姿勢も高かったことは想定でき、この研究からのみで「一日保育者体験」の有効性について実証することは不可能である。しかしながら、対象者が、「我が子や子育てに全く関心のない状態」ではなく、むしろ、「親として子育てに積極的であろうとする状態」にあるとみた場合、その状態の親であっても、「一日保育者体験」が意味を持っているということは本研究からいえるのではないかと考えられる。園と連携姿勢が高いからこそ、多様な視点を持って「みる」という行為が行われたともいえる。また、多様な視点で保育や子どもを「みる」という経験を振り返りながら語る中で、子育てのパートナーシップ醸成の方向に向かうことができたのではないかとはいえる。

2. 多様な視点を提供することと子育て支援

本研究は、「親の子育てを支援する」ということを改めて問い直すことができたといえる。土谷 (1994) は、母親のいわゆる母性意識や養育行動は、子どもとの日々の関係の中で調整することが可能であり、親と子どもの関係は、親要因が子どもの発達に必ず影響を与えまた親が常に調整を迫られるといった一方的なものではなく、お互いに影響し合い、相互調整可能な関係であると考えたと述べている²¹⁾。つまり、相互に調整可能な存在として親子の関係性を豊かにしていくことができれば、その子育ても変化するというのではないだろうか。

また、菅野 (2002) は、母親たちが体験した子育ての人間関係についての分析から、肯定的エピソードとして、子どもの成長発達への喜び、他者から自分や子どもが認められること、自分の世界が広がること等をあげている²²⁾。

このように、親にとっては「他者から自分や子どもが認められる」環境が存在することが重要であり、自分の世界の広がりを実感できる機会を持つことができれば、つまり、たとえば、保育園が、「一日保育者体験」などの保育活動に親が関わるような環境を用意し、多様な視点を提供していくことができれば、親は子育て意識を変化させていくことが可能なのではないだろうか。多様な視点を提供するというのは、たとえば、「きょうは何かみんな集中して・・・家とはまた違う空間なんだな」という語りにもみられるように、別の空間を用意し様々な立ち位置で物事を見る機会を提供し、子どもの見方に変化をもたらすことを目指すものである。特別に講座やワークショップを立ち上げるのではなく、日常の保育

活動という一見雑用の多い混沌とした空間であっても子どもと直接関わる場を提供することで、新たなつながりが作られるということなのではないだろうか。家庭とは違う別の立場で子どもと関わる機会を提供することが、有効であると評価されるのであれば、「保育者体験」という取り組みは、保育園が今後実施可能な子育て支援のひとつとして検討できるのではないかと考えられる。

このことは、未就園の子どもを持つ母親に対して、保育体験による子育て意識の変容があり得ることが推察できよう。田中（2013）が未就園児の親のプログラム参加における意識の変容から「とまどい」と「こちよさ」を見出した²³⁾ように、親は、子どもたちと関わることを通して、「子ども」という存在をより深く理解していくことができるのではないかと考えられる。

本研究は、「体験保育者」として保育に参加した親が、わが子も含め「子ども」を理解しつつ、子育てへの意識を変容させていくプロセスを分析したことに特徴がある。わが子だけでなく、個々の子どもの興味・関心に応えながら子どもたちの活動の充実や安全面への配慮をしつつ、一定の責任感をもって保育に関わるということを経験したことが、親としての意識にも影響を与えたといえるだろう。親の日々の努力に目を向けつつ、親同士の関係性を深める取り組みがより重要になってきているといえるのではないだろうか。そのためには、親同士の関係性を親との協働的な探究活動の中で明らかにすることも必要だろう。近年、研究参加者との協働によって実践上の問題を解決しようと努めるアクション・リサーチの一環として、「協同探究」という概念も提唱されている²⁴⁾。研究対象者を、データ源ではなく共同研究主体として位置づける「参加型の質的研究」といえるが、今後は、こうした「協同探究」としての子育て支援研究のあり方についても追究していきたい。

注

- 注1) 親は語りの中で「保育園」「園行事」「園との連携」などと使用しているため、「保育園」という言葉のイメージを重視し、本論文では「保育園」の表記を使用する。
- 注2) 平成12（2000）年施行の保育所保育指針では、第13章で「地域において最も身近な児童福祉施設であり、子育ての知識、経験、技術を蓄積している保育所が、本来業務に加えて、地域における子育て支援の役割を総合的かつ積極的に担うことは、保育所の重要な役割である」と明記された。その後平成20（2008）年告示の保育所保育指針でも「保育所に入所している子どもの親に対する支援」だけでなく、地域の実情を踏まえた子育て家庭への支援にも努めることが記述されている。
- 注3) 「保育参加」は、入園当初の親子の不安を解消するために保育園で始まった子育て支援事業のひとつであるが、近年は幼稚園でも取り組まれており、文部科学省が行った「平成26年度幼児教育実態調査」では、幼稚園の中で親に対して「保育参加」を実施しているのは公立76.7%、私立59.5%、合計65.8%となっている。

引用文献

- 1) 中央教育審議会報告（2000）少子化と教育について
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309769.htm
(情報取得2014/0404)
- 2) Aries, P. (アリエス) (杉山光信・杉山恵美子訳) (1966/1980) <子供>の誕生. みすず書房. 41
- 3) 太田素子 (2008) 子宝と子返し— 近世農村の家族生活と子育て— 藤原書店

- 4) 広田照幸 (2003) 現代の母親はダメになったのか?— 歴史からの考察 —. 広田照幸 (編著) リーディング日本の教育と社会③子育て・しつけ. 日本図書センター. 227-234
- 5) 齋藤学 (1994) なぜ今児童虐待か. 齋藤学 (編) 児童虐待. 金剛出版. 22
- 6) 藤永保 (1994) 育児・しつけ・生活環境. 岡本夏木・高橋恵子・藤永保 (編) 幼児の生活と教育 2 生活と文化. 10
- 7) 中央教育審議会答申 (2005) 子どもを取り巻く環境変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm (情報取得2014/0404)
- 8) 齋藤浩志 (1988) 教育とは何か. 青木一・大槻健・小川利夫・柿沼肇・齋藤浩志・鈴木秀一・山住正巳 (編). 現代教育学事典. 労働旬報社. 181
柏女雪峰 (2003) 子育て支援と保育者の役割. フレーベル館. 28-29
- 9) 太田光洋 (2002) “子育て支援” とは何か — 子育て支援センターとの関わりを通して. 保育の実践と研究. 第6巻第4号. 13
- 10) 大豆生田啓友 (2006) 『支え合い、育ち合いの子育て支援』 関東大学出版会. 43-44
- 11) 法月泉・金田利子 (1997) 親性の発達にみる「保育参加」の効果: 3歳未満児保育を中心に. 日本保育学会大会研究論文集. 50. 336-337
- 12) 山本理絵・神田直子 (2002) 子育てネットワークづくりに関する研究 (11): 子育て困難と親の支援ニーズ その2 人的ネットワークと就労意欲の視点から. 日本保育学会大会発表論文集55. 160-161
- 13) 今井和子・新澤誠治・早川貴美子・依田幸子・新澤拓治 (2002) 親子の生活の見直しとその援助: 子育て塾の実践をめぐるII. 日本保育学会大会発表論文集55. 156-157
- 14) 増山均 (2009) 子育て支援のフィロソフィア— 家庭を地域にひらく子育て・親育て—. 自治体研究社. 9
- 15) 文部科学省初等中等教育局幼児教育課「平成26年度幼児教育実態調査」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/10/1363377.htm (情報取得201512/12)
- 16) 上原秀夫 (2001) 参観から参加そして参画へ. 全国社会福祉協議会 (編). 保育[齋藤まさこ]の友. 49 (6). 11-13
- 17) 牧裕子 (2006) 保育参加. 宍戸健夫・金田利子・茂木俊彦 (監修) 保育小辞典. 大月書店. 296
- 18) 橋本祐子 (2008) 幼稚園における親の保育参加に関する一考察 — 「先生」として参加した親の感想文の内容分析より—. 聖和大学論集. 36. 173
- 19) 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂
- 20) 蘭由岐子 (2009) 相互行為としてのインタビュー. 谷富夫・芦田徹郎 (編) よくわかる質的社会調査 — 技法編 —. ミネルヴァ書房. 79
- 21) 土谷みち子 (1994) 母親の育児に係わる意識や行動の変化過程: 事例研究. 日本保育学会大会研究論文集 (47). 148-149
- 22) 菅野幸恵・白坂香弥・真栄城和美・繁多進 (2002) 乳幼児を持つ母親の意識と感情9 — 子育ての人間関係の中で生じる肯定的感情と否定的感情 —. 日本保育学会大会発表論文集 (55). 386-387
- 23) 田中文昭・戸田有一・横川和章 (2013) 幼稚園での異年齢交流型子育て支援プログラムにおける未就園児親子と在園児との関わり — 行動観察記録のM-GTAによる質的分析 —. 保育学研究. 51 (2). 10
- 24) T.A.シュワント (著) 伊藤勇・徳川直人・内田健 (監訳) (2009) 「協同探究 cooperative inquiry」北大路書房. 49

「一日保育者体験」に参加した親の子育て意識の変容

表 1 分析ワークシート（概念 71）

<p>概念 71 子どもと一対一で向き合うことの発見と喜び</p>
<p>定義 体験保育者として、子どもたちと一対一で向き合うことにより新たな発見や喜びを感じる</p>
<p>ヴァリエーション（具体例、データの一部）</p> <p>なにか、お人形とか、お花とか、あと好きな色なあいて聞かれて、その私の好きな色を使って絵を描いてくれるんですね。女の子でしたけど、やっぱり私の好みにあわせて、何がいい、何色がいい、とかって、折り紙なんかも、何か折ってあげるね、何がいいって、聞いてくるんです。だからこっちから、何々を作ってください。お願いします。って頼んで、注文したのを作ってきてくれて、それをプレゼントしてくれるんです。（SK氏 1・4）</p> <p>何となく自分の子どもにちょっと話しかけてみたり、最初は話しかけてみて、そうしたらその友だちがよってきて、もうちょっと和む感じになって、それでなんかこう自分が、打ち解けてきたというか（OD氏 1・4）</p> <p>えっ何この人って、ねえ、そういうふうに構えられちゃったら、あの、ちょっと、入っていけないじゃないですか、なかなか、自分の方から無理矢理入っていけないこともないかもしれませんが、でもそれでは楽しくないというか、お互いにね、（SK氏）</p> <p>はい、・・・折り紙を折ろうという子がひとりいて、それは、すごくなんかこれあげるとか、なんか、折り紙をもらったとかしたんですけど、んー、そうですね、すごくうれしかったですね（OD氏 2・3）</p> <p>うん。でも、1日みてただけでも、この子はこれが得意なんだとかってわかりますね、すごく。もうわかりました。（YM氏 8・1）</p> <p>ピアノを習っている子なんかは本当にすらすらすらすら弾いているので、得意な子はこうやって好きでやっているんだとか、わかりますよね、やっぱり。この子が好きなことはこれなんだとか、この子はちょっとすぐ泣いちゃう子だからとか。——そうですね。よくわかります。（YM8・2）</p> <p>そうですね。合わせながら（笑声）。まあ、みんなとにかくしゃべってくれるので、それをふんふん、ふんと、「ああ、そうなんだ？」なんて聞きながらいただきましたけど。はい、おいしく。おなかいっぱいになりました（笑声）。（IK氏 7・3）</p>
<p>理論的メモ（解釈の検討記録、その時の疑問、アイデアなどを記録）</p> <p>◎限られた時間ではあるが子どもと一対一でのやりとりの時間が生まれる。大人と子どもの関係と言うよりは同等の関係、人と人との関係性が生まれている。みんなのお母さんお父さんである、我が子以外の子どもと1対1で向き合っている。</p> <p>◎集団の中にいると、親という立場を離れて体験保育者として子どもたちと関わらざるを得なくなる。そのような関係の中で、子どもの振る舞いに対する新しい発見や、それと連動する自分自身の気持ちの変化、喜びを感じている。</p> <p>（IK氏 4・2）…… 楽しい体験ではありますが、難しい——答えがないので、どういうふうに接するのが一番いいのかというのがわからないままやっていて、なるべくだれも傷つかないように、みんな楽しめるようにというのを思いながらはやっているんですけど、結構難しいものだなという感じですね。うちは子ども2人なので、適当にあしらいますけど、もっといっぱいいるというのは結構大変だなと思いますね。</p>

表2 カテゴリー別概念一覧

コアカテゴリー名	カテゴリー名	NO	概念名	定義	録りの例
はじめの緊張や不安からの一歩	はじめの緊張や不安から一歩踏み出す	12	親同士の関係を壁を感じる	様々な場で親同士のコミュニケーションを成立させるのに難しさを感じる	子どもと子どもの関わりとその親同士の関わりが難しい。親同士のこなのですけど、仲良くないですけど、あまり深入りしすぎて、まあ、これから、長い、保育園小学校、中学校と…難しい。(他5例)
		13	はじめの緊張や不安	はじめに園や子どもたちと関わりを持ちはじめるときには緊張や必要な情報が不足しているようで不安を感じる	入りながら何かかわらないままやっていると、終わる頃にわかるみたいなの…(他7例)
		14	案ずる前にチャレンジする	先のことを案ずる前にまずチャレンジしてみる	役員にあたっちゃったんです。ははは、…下の子ども預けて役員さんをして、後から思えばそれがなければ自分は混じれなかったと思うのでよかったんですけど…(他8例)
保育体験を通じた子ども理解・保育理解	新参者としての理解	21	受け入れられた喜びを感じる	子どもたちに受け入れられた安堵感・喜び	食事の時間は、4テーブルくらいに分かれていて、一緒に食べたい人はじやんけんをしてください、といわれると全員が手をあげてくれた。すごうれしかったですね。(他4例)
		22	子どもの気持ちに近づく	子ども時代の生活のルールを思い出したり、保育園での今の子どもたちの生活を体験することにより、今の子どもたちの気持ちに近づいてくる	昔は結構、いろいろと持って帰れたじゃないですか、食べ残したじやんけんも、…そうそう、いつかの園が机の中に落ちていたして、…今はないですね。(他5例)
	親としての理解	41	小さな安心と不安を感じる	我が子と比べることによる、小さな安心と不安	自分のこと違うところか、同年代の子はこれぐらいのことはできるんだろかとか、がまずわからないですね。近所では(同世代がいなく)あまり関わりがないので、そういうのをみる機会はすごよかったと思います。(他7例)
		51	子育てを振り返り、理解が深まる	親として子どもへの関わり方に気づきを得る	時間ちゃんとして食べてるの、すごいなってちよつと、…家でだと結構気にしないで、ちよつと偉いと思いました。(他3例)
	体験保育者としての理解	23	子どもたちの助け合いに感じ入る	子どもたちが自然な姿で、お互いに優しく行動している姿に感じ入る	書けない子があるとか、隣の子どもとか教えてくれて手伝ってくれるんです。…一生懸命手伝ってくれて、…お互いの、助け合えて、協力合せてやってくれるんだなと思って、…書けないの、だけでは終わらないんです。(他2例)
		31	子どもが認められていることを知る	子ども個性が認められていることを知る	元々得意な子もいますが、中には得意ではない子もいるじゃないですか、指図とか、だけど…練習すればできるようになるから、根気よくやってあげて、できると、わさごいどほめてもらって、…(他6例)
		61	心地よい距離感で子どもたちの純粋な気持ちを感じる	心地よい距離感で子どもたちの純粋な気持ちを感じる	そうですね。…大分冷静というか、もうわかっているというのはすごく感じますね。もうみんな、でもまだまだ…まだまだという、かわいらしいところもあり。(他6例)
	保育者としての理解	63	クラスの子どもの成長を実感する	保育園での様子から子どもの成長している姿を実感する	だけど、今日は何かみんな集中して、あつてもこっちでもやっているので、何か家とはまた違う空間なんだなと思いましたね。自分の役割がないと、やらなきゃいけないことというのがすごくわかっていて。年長さんになると。(他4例)
		71	子どもと1対1で向き合う中で発見と喜びを感じる	体験保育者として、子どもたちと1対1で向き合うことにより新たな発見や喜びを感じる	お人形とか、お花とか、好きなものはなあにと聞かれて…だからこつちから、何かをつつてほしい、お願いしまし、つて頼んで、そうすると注文したものを作ってくれて、それをプレゼントしてくれるのです。(他7例)
	多様な子育てで親とパートナーシップ	我が子への情愛を改めて自覚する	82	我が子の成長を実感し喜びを感じる	親の立場で、保育園での様子から我が子の成長している姿を実感する
83			我が子を改めて愛おしく思う	子どもの成長を振り返りながら我が子を改めて愛おしく思う	洗濯物が干せないとか、Nがいて2歳半でMが生まれて、一人なくとも一人がきて、…今になったらあのときはもうないんだなとおもって、ははは。(他3例)
園や保育者の立場を理解する		92	保育者の愛情を注ぐ姿に共感する	保育者も親と同様に愛情を注いでいることを発見し共感する	もう卒園なんとなつたら本当に泣いちゃうなと思って、先生の気持ちがつつてよくわかりましたね。…自分の子どものように考えてくださっているんだなって、すごくわかりました。(他6例)
	93	園の立場を理解しつづ葛藤する	園の立場を理解しはじめると葛藤が生まれる	熱が下がればすぐにでもというところがあるじゃないですか、大変ですよね、お休みする決まった日数がありますけどそれを必ず守っているかという…それは、もうね、しかたない、なのかな、と思っはいますけど…(他3例)	
共通の関心から親同士の関係が深まる	すばらしい仲間との出会いを肯定する	10	保護者会役員や園行事のボランティア等を通して知り合い友達になる	保護者会役員や園行事のボランティア等を通して知り合い友達になる	自分の親にいてもなんかただ返されるだけ、それで終わっちゃうけど、仲間っていうと何か違う答えも出てくる。…やはり一人じゃ無理で、…相談相手、友だちは大事です。(他7例)

「一日保育者体験」に参加した親の子育て意識の変容

図1 結果図 保護者の子育て意識が変容するプロセス

